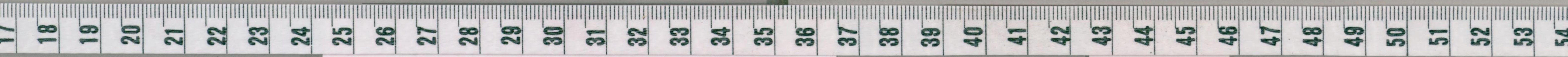
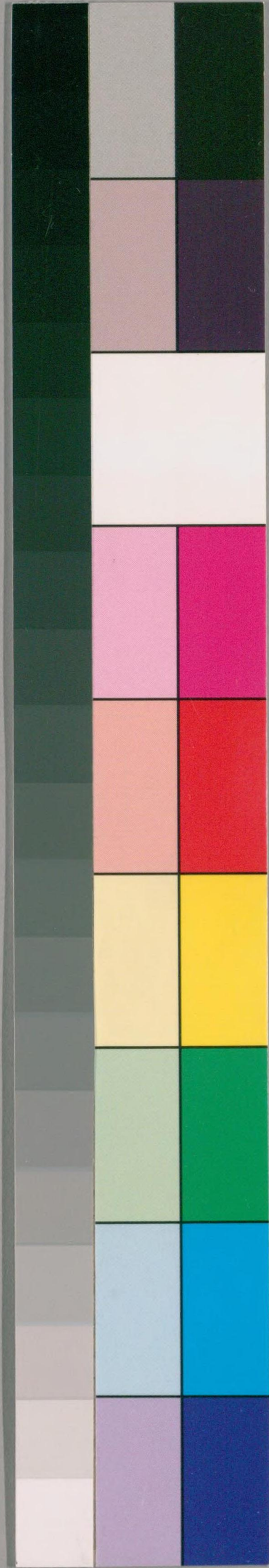


863
120



国立国会図書館 タイトル『水の音』 請求記号 863-120

ガラス使用



863-120



水音集序

採茶梅叟。嘗籠茶井堤蛙子。鐘愛

矜惜。宋處宗之雞不翅。金聲鐘音

明霄相唱和。不知老之將至。曰此

是我之衣鉢也。雖易簪髮之際。猶

能諧其言。屬之房人杉長而逝矣。杉

長嚮已得許可久矣。大智本業皆



悉成就。為護師門。受持正風。能獅子
吼。名聞十方。今歲孟冬旬有四日。
有先師大祥之奠。因及斯集。云集
以水音名。蓋取之蕉翁舊池之句
乎。抑將有說哉。昔有人笑。登芳野
而聽鶯。聞其聲而不視其貌。謂之
花聲。臨井堤而聽蛙。聞其音而不

視其形。謂之水音。所謂花聲水音
為之妄邪。然亦音韻圓活。有異乎他。
則彼人是哉。其誰謂之龍身。譬而不
知類乎。觀夫紀氏之序。其古今也。標
出啼花。鶯棲水蛙。而言水言之不
可以已矣。蓋又取之音韻圓活。而
冰謂數。鶯泣蛙之謂也。夫天下之

鴨鳥蛙也多矣。鴨鳥而鴨舌。蛙而鴨喉。何以鴨蛙為。然猶謂之鴨蛙。溜者皆是也。渠焉知花聲水音之真者乎。蓋好言自口。茶乃言自口。花聲水音。自其口出。而後復能知其真者而換之而已。烏乎。於長之水音。真箇真笑句。總是伯牙洋。



何取師消靡。物則茶舍遺愛。人則梅門餘芳。花聲水音相唱和者若干章。勒為一編。播之十方。聊代筵筮之實。以表歸福之儀。蓋於長之志也。或云。夕啼花。鴨鳥梅。水蛙。所謂晉秦良匹。唐媛孔速。冰邪。子今特舉水音。而遺花聲。以口房。猶

有宗拱者。有道上人也。年多於杉
長。又老於句矣。固梅門一雙之翹
楚也。杉長已有斯集則宗拱豈世
繼撰乎。吾為言之。位之。可。時
享和矣。亥孟冬。操筆東都新
渠之北岬。

真逸



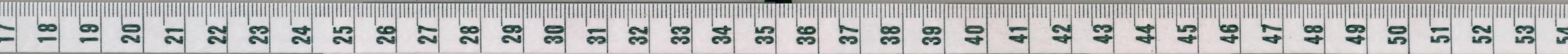
水乃音

蛙小傳

杉長



於もは蛙と山吹井堤ありあらくい
守の百々舊く華洛二條り謝
初と世を經君と他お武城ふくり
春秋三と世れ風月りた右きり
先師梅人の雅名り好き述ひたれ
一時涉りりりり割り茶舎乃
珍玩りおくり給りぬり師や以道の



水一

歡ひり堪ばせし品もこれぞ海をちて
編集の企めを為し餅拾ひ笛吹くを
法に扱ふ日有り只是小のこを才に申され
りり五月の雨にちりちき以てわつ中の
部と川宛乎とて死す人何し
ちきしを乞ふ故人のみやひを志す
なすし其秋不倭茶舎より糸し
是を又内り其数四の師ゆひきし
見えや杉長彼法師の説みたるは色

水一

思く形ちいし夜いし更まは老猶
いしとんやとりて耳あし
居吾汝を埴友と呼せし寛れ良友と
埴笛と茶舎と申す乃自讚ちり
か古今代清終末もに更て聖は
そく安房といふ中絶武年いしを
享和改元かのと此酉の十月十四日を
志まるとり志くといふ日この師
身由りてと海南の宗拱と志し

猶少きころぬわち道ヲ斯文をりし
ちひ正風の大山崩し此日水頭より旅
ちききして蓑猿を連れ百首の浦よる
小舟より赤糸敷里よりのいちをりて曰ふ
蘋蘩茂るをいしをためくを囑哉
ちききはつりちりり社盟の人々改め
きき語り遺愛のあつきをりし
笛と埴をちのれり素ぬき役やちききの
中れよるちひたきき不恐あふむる先師

水二

在せれ會亭ちとハせこみ追若の途を
初きき一字一涙の歌仙を修行し
人くとちふ名跡をいみむ蓑猿の
袖よりいり例の舟にて本更津に渡り
同社春賀ふたききと詠をいし山と山
川まき川長々陋所小帰るきき西月
すききちとあふん二季啓誓の時地中を
出く蒼鏡を追ふ遠邇の詞友白あり
文のちきき机上頓りうつこき歌袋の

ちもあまのやまにえゆまハ中
然く大いなるをみぬ一式小冊とありぬ
こと一癸亥冬十月と先師辭世の
三周多あられいさう報恩の事なり火を
うきく二世と新茶菴に文庫を初き
生前の遺稿をこたくけ吟懐を求く
俱り梓桑ようつし西子かうの同社
告んと交ふ所中一の傳うん志ありぬ

水三

尋蛙辞

圖南

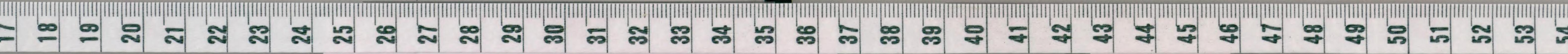
世も彼と是を待くあつれ是を
彼を得くまうたういふいふ
蛙との古今は席とありて
華林に御遊り官私の地を同ハ家
柳の新友部に鼓吹山崎の法師と
子を法めくなん歌中めつるを
和漢の意識をやうやういふ

風終乃ちちみほくくわりやあつらん
さけし春ある園は君と井子の玉川
をわうむさくちれ茶舎よりその
香をききし麦売乃ち鱧のいけお入
干菓子もみちりちり秋の盤に
月を洗く燈火は出ちる笛耳
とて琴もきく色清凡朗月時
光りちりし内道や世と朝変書
化乃くられ月に師も二枚の月を

水田



見収く無何有れさくく帰る夕に
小萩の露 茜菜乃ち雷震る尾
を照し今や安否の杉長くめとに
冬あけりし川鳥耳 縄壇の粉じ
虹をたかぬ氣息とせしくく
山吹の春も川あけりちり先作生
そけ井もやえくさむさく野もあ
くしれ巻くすくも家もく知まり
眼花井底乃ちけくく雨の面乃

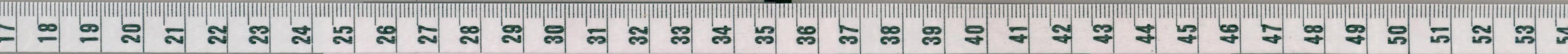


水ともいふらん、花の玉川の名なりや
誇らん、爾う曾祖ハ阿翁より友より
志賀の虫より川よりみたり水雲夢
腹よりしし五老の戒師より大師号
佛果乃縁よりりともるらん

水たき

春の日は蛙おまけて音初し
畔におく西の蛙けきこえり
啼くも川長安くくたあを
濁るなれた友うれあも位も蛙
おみ入るは後よりちる蛙
吹口よりあいとえりま蛙笛
黄鸝お花ハ啼せく蛙の南
山寺やうろけ奥を鳴る川

成美 一茶 完末 文足 以足 大扁 沙羅 祇徳



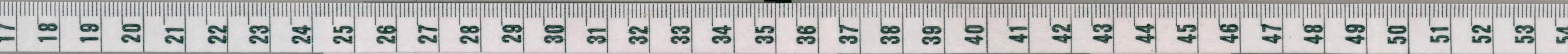
きちくと雨降る蛙初より
さへは登ぬらう田井の初蛙
蛙まのいかによるとまの隅田川
草むらの馬酔木咲き夕蛙
三日月は入汐落き蛙可軒
一步つ五百崎遠し鳴るつ
柵耳志うみとせく啼蛙
水うし蛙鳴きや金沙子
横おもさおのりるかき啼蛙

春蟻
園女
みち彦
菅雅
蚊牛
暗雀
可里保
濤月
雪洞

水六

うち霧む田流る蛙う志るれり
馬士始唄も是て居るんは蛙
蓮瓶のあまを初く啼うる川
野始蛙初る川鳴るも終る
かき蛙山吹折るかさき
夕風乃言と雨ちる蛙初利
啼やかき川雲はまみ也と潦
蛙子の流きて首つ日和の
山吹は色花よりて啼蛙

冲巢
春賀
支遠里
三餘
百羅
徐来
如柵
知仙
亀静



月影の蛙も動く多田外
菊明
灯乃葛西太良之町うら
梅路
啼之蛙も是自然の内濁
花外
山田吉保部ソリこおちく蛙
秋策
行水や流るゝものや
暮九
三界も安し蛙乃多世帯
朝富
水新れ様ちくせは蛙の那
青児
浮草乃よき衣着る蛙うら
華屋
飛くまは雨ふ埋く啼うら
知友

水七

雨の野ととちく向る蛙うら
巴文
町蛙灸のうゆきおんきり
庵月
星い〜川多田み屋く町蛙
一松
雨植るををられて糸格子
青莪
夕榮の田わ〜新〜啼〜蛙
楚流
蛙ち〜時代を得〜る落葉
鳥周
眼た〜きに涙ま〜く人蛙
梅井
瘦えゆ新清老ち〜人の蛙
松人
其巻もあ〜ふや〜糸を啼蛙
成蹊

先師の笛を吹くも鳴す

蛙くあつまぢうらうかうの
 草玉根ふゆけふあや啼蛙
 松の枝の多に傾く蛙の非
 蛙子や藪田の氷解てり
 啼のそり其古郷う急ひの
 そもく是ハ諸國一見の蛙小
 夜や昼や大腹中に啼蛙
 只ち〜其付を啼あそり
 桃阿
 五竜
 梅堂
 湖月
 一友
 池月
 莫非
 南志

履捨く珠乃蛙き〜日あか
 明蛙おもとぬ乃〜は〜ちり
 蛙ち〜や喜も考もちん小糖
 夕詠〜て居新門や啼蛙
 笛提て門〜出る夜蛙蛙外
 宿う〜〜あるあ眠〜蛙外
 タ〜〜川おくれあや通〜り
 籟れ地〜〜心あや鳴〜る
 物習ふあ〜のあ味〜ち〜蛙
 梅見
 伍明
 里挂
 里候
 近之
 松蘿
 焚雀
 三徑
 如一

ちくくうま川 佃とるふ成りたり 知一
不思議ちれおれおれおれ也飛蛙 文左
おれおれおれおれおれおれ也蛙外 吳桃
早子麦の露をわらう蛙の南 南居
島影乃近くちれおれ也蛙 素十
猿猴のこ内影もちれ蛙の形 素白
お山乃端け星印も川 月曉
啼き蛙井とむもまおれ 里曉
鳴蛙おもたきおれと成り 登春

泉水は月も曇りり鳴くも川 豊英
日は惠と成りり月もち蛙 其柙
飛也蛙啼や蛙外 澗石
いしを語つて蛙きくおれ 民風
おれおれおれおれおれおれ也蛙外 五長
啼蛙おれ乃山吹け影也こま 眠虎
夕西の早平吹入おれ蛙の外 文茂
江外縁の人平流も蛙の外 豊浦氏
蛙鳴野を来くおれ成り 成蘿



松賣此家也たつ〜く蛙 百喜
ち〜蛙きぬ〜の袖帯きき 竜左
蛙鳴や水の光る乃家り入 竜尾
らを川啼也叢年〜の天下一 草活
啼うもら何り出あ〜く落月如 巴石
蛙岡也何もち〜く夜乃人 嵐奴
笛吹〜く流とあるを啼蛙 富川
お〜〜なまきききき〜く蛙笛 菖葎
あふ山れ故実流〜て蛙のら 琴松

水十

瑤ふ小歌蛙此やと成子鬼 渠北
差に入新道と蛙の鼓樂のら 酔茶
道草の駒作ききり〜く蛙 木三
虫乃毛春を蛙り〜妻きり 慕長
蛙集撰ふんを種か御法外 木几
飛込て多乃考せん瘦ら〜ら 越見
陽をの燃〜中〜蛙可〜南 不孤
雲れ上遠〜く仰〜く蛙 文里
せき山〜く〜あ〜り〜く〜を井子の 無為

蛙聞く水也玉水如身みかふ 宗拱
啼きく蛙飛りり夕小夏 宗陽
玉苗乃すくく運る蛙の那 郁賀
寂きをり歌年何して何多蛙 杉長

浮く時々

一物とちき蛙うま

梅人居士



仰高師恩甚と記と
志し心俯し〜記念乃
蛙とありも〜小味ハ採の
佐物小切えて善樂自在
若子亦業とた〜〜え



師も備へ城にききし
過堤未末此のまよ
ほと

享和三癸亥冬



杉本再縁

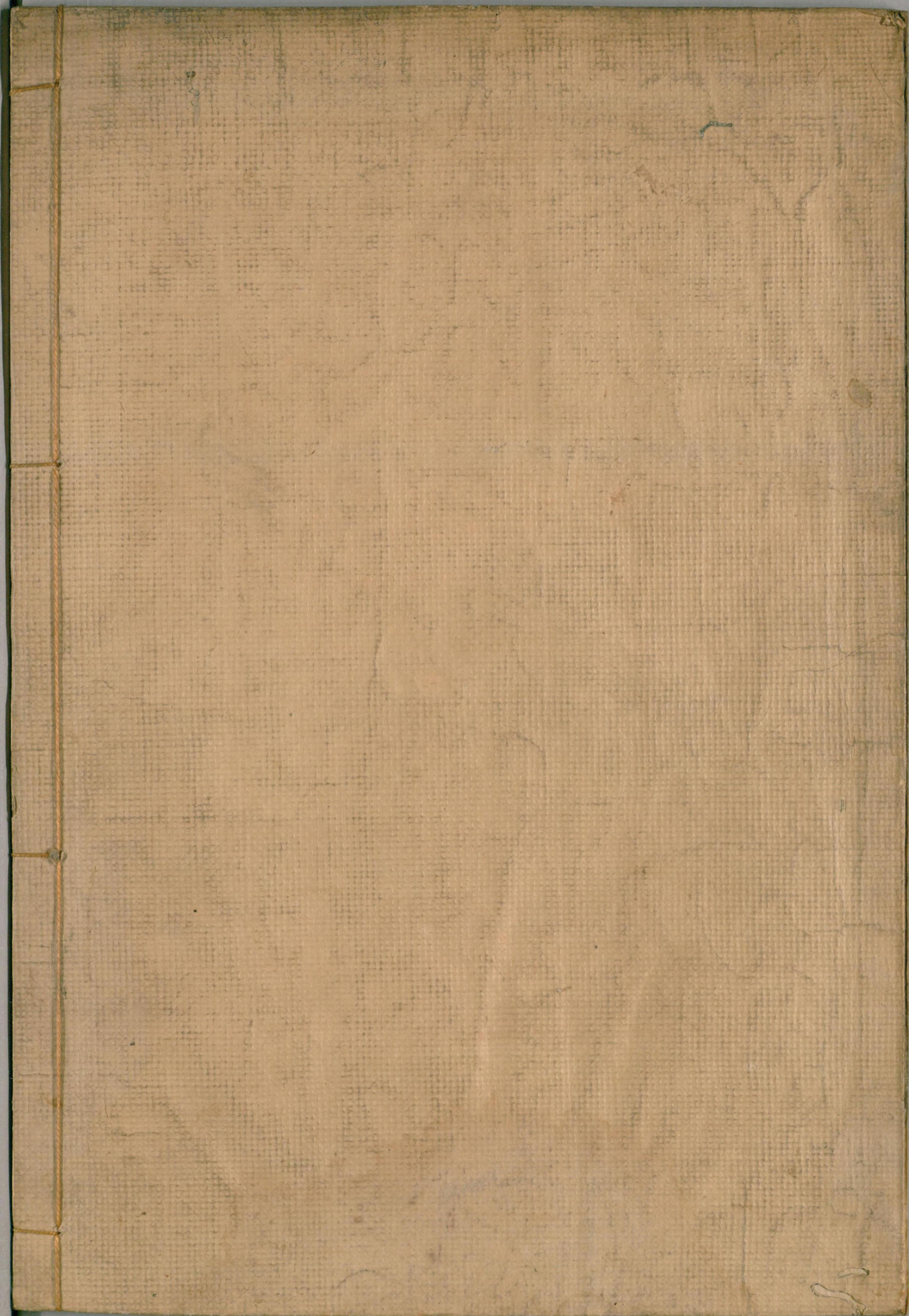


版
世し佳國と云ひし人のちて佳
苑しおもひ志をまうし
園のうま葉に安んずる
う藤をいほしけり
う鞋をききす
秋のそわを
まふむとの土ぬる



まひりてしこ田に水を流するは
 うけいひてなるはいほさかひのいひ
 脚とよめちか人の心あをばうむ
 せもはなみいありし人我勢ひて
 母葉の木のれきうせとしく
 杉と其人うふりわ

多田老樵集卷
 中



17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54

国立国会図書館 タイトル『水の音』 請求記号 863-120

ガラス使用